

# 最高敬語（二重尊敬）確認テスト（古典敬語） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾

## 解答・解説

---

問1 二重尊敬。「させ」のすぐ下に尊敬の補助動詞「給ふ」があり、主語が「帝」（最高位）なので、最上級の敬意を表す二重尊敬と判断する。

問2 ①は、作者（語り手）から、動作の主体である「帝」への敬意。二重尊敬なので最上級の敬意である。

問3 二重尊敬。「せ」の下に尊敬の補助動詞「給ふ」があり、主語が「上皇」なので二重尊敬。「お笑いになる」の意。

問4 ②は、作者（語り手）から「上皇」への敬意。二重尊敬による最上級の敬意を表す。

問5 （上皇が）たいそうお笑いになる。

問6 二重尊敬。根拠は「下に尊敬の補助動詞『給ふ』があるから」。「(中宮が) 歌をお詠みになる」の意で、他人に詠ませる使役ではない。

問7 （中宮が）歌をお詠みになる。

問8 二重尊敬。「せ」の下に「給ふ」があり、主語が「帝」なので二重尊敬。「(帝が) 大臣をお呼びになる」の意。なお「大臣を呼ぶ」という内容自体に他者が関わるが、ここでは形（下に尊敬語）と主語の高さから二重尊敬ととる。

問9 使役。下に「給ふ」があるが、「女房に」と使役の相手が明示されているため、「させ」は使役と判断する。「(院が) 女房に火を灯させなさる」の意で、「給ふ」は動作主「院」への尊敬。⑬の「をして」と同じく、使役の相手が示されていれば下に尊敬語があっても使役になる。

問10 二重尊敬。「しめ」の下に尊敬の補助動詞「給ふ」があり、主語が「帝」なので二重尊敬。「しめ給ふ」は漢文訓読調の文章に多い最高敬語の形。

問11 二重尊敬。「させ」の下に「給ふ」があり、主語が「上（=天皇）」なので二重尊敬。「(天皇が) 御車をお寄せになる」の意。

問12 使役。「す」の下に尊敬語が無く（「書かす」で言い切り）、主語も最高位とは限らないため、「(人に) 文を書かせる」という使役と判断する。

問13 人に手紙を書かせる。（使役なので「お書きになる」ではない点に注意）

問14 使役。「せ」の下に尊敬の補助動詞ではなく過去の助動詞「けり」が続いており、尊敬語が無い。主語も「主人」で最高位ではないので「(童に) 水を汲ませた」という使役。

問15 子ども（童）に水を汲ませた。（使役）

問16 二重尊敬。「おはします」は尊敬の補助動詞（「～ていらっしゃる・お～になる」）。その上に「せ」があり主語が「帝」なので二重尊敬。「(帝が) 御琴をお弾きになる」の意。

問17 使役。「持たす」の「す」の下に尊敬語が無く、主語も「翁」なので「(使ひに) 持たせる」という使役。

問18 ⑫「悩ませ給ふ」は、作者から主語「院(上皇)」への敬意で、種類は尊敬。「(院が) ご病気でいらっしゃる・お苦しみになる」の意。

問19 「奉ら」は謙讓語で、御文を受け取る相手(より高貴な存在)への敬意。「せ」は使役の助動詞「す」(敬語ではない)。⑬は「近き者をして」と使役の対象が「をして」で明示された使役の構文なので、「(近き者に) 奉らせなさる」と読み、「せ給ふ」を二重尊敬とはとらない。「給ふ」は尊敬語で、動作の主体である「帝」への敬意。このように、下に尊敬語があっても「をして」などで使役の相手が示されていれば、「せ」は使役と判断する。

問20 (A)「笑ひ給ふ」は補助動詞「給ふ」だけの普通の尊敬で「お笑いになる」。(B)「笑はせ給ふ」は「せ給ふ」の二重尊敬で、同じく「お笑いになる」と訳すが、(A)より一段高い、最上級の敬意を表す。訳語は似ていても敬意の度合いが異なる。

問21 普通の尊敬(給ふだけ)は広く高貴な人物一般に用いられるのに対し、最高敬語(二重尊敬)は天皇・上皇・中宮など最高位の人物に限って用いられ、敬意の高さが一段上である。つまり敬意の「高さ」と、向ける「対象の限定度」の両方で差がある。

問22 最も重要な着眼点は「す・さす・しむ」のすぐ下に尊敬語(給ふ・おはします等)が続くかどうかである。例えば本文⑧「書かす」は下に尊敬語が無いので使役だが、①「上げさせ給ふ」は下に「給ふ」があるので二重尊敬になる。

問23 最高敬語は天皇・上皇・中宮など最高位の人物にしか用いられないため、文中で「せ給ふ・させ給ふ」が使われていれば、その動作の主語はそうした最高位の人物であると推測できるから。